

A decorative border in red ink, featuring a repeating pattern of stylized flowers, leaves, and vines, framing the central text area.

岩波文庫

889—890

白秋詩抄

北原白秋著

岩波書店

昭和八年五月五日 第一刷発行
昭和三十三年五月六日 第三十四刷改版発行
昭和三十八年六月二十日 第三十刷発行
白秋詩抄
定価 ★★

著者 北原 白秋
きた はら はく しゅう

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩波 雄二 郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田 一 雄

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
神田一ツ橋三ノ三

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩 波 文 庫

889—890

白 秋 詩 抄

北 原 白 秋 著



岩 波 書 店

小 序

この詩抄は、もとより選集であつて、わたくしの詩業の片鱗である。片鱗ではあるが、主として自身の詩の本格とするものの一部一部でないことはない。わたくしの詩風も幾變轉したが、この詩抄は、多少ともその時代の季節と心音とを傳へてくれるであらう。厳しく鏡に映して描きとつた白晝像といふのでもないが、無くてはならぬ光や影は收めてある。ただ今日の眼で氣易く親しくこれに臨んだ。削除した部分にも何か棄て難い好みは動いたが、一つの枝を立體として浮かす爲には、その空間表象は念はねばならなかつた。重複を忌み、同型の枝葉はその多くを伐り去つた。しかも密かに愧づる故は、我が詩業を通貫する一つの脊梁が、わづかにこれだけの高さのものかといふことである。

抄した詩は「邪宗門」「雪と花火」「白金ノ獨樂」「水墨集」「海豹と雲」の五つの詩集に求めた。かの抒情小曲集「思ひ出」(明治四十四年)は次の抒情詩抄の爲に遺し、童謡民謡の類もすべてこの詩抄には與らない。

なほ、大體のことは詩友吉田一穂君に委^{まか}した。かうした小冊子の編纂や、詩の布置^{ふち}、紙面の整齊といふことも、わたくしたちにはかなりの詩魂を要する。快^{こころよ}く感じていただければ忝^{かたじけな}く思ふ。

昭和八年四月

北原白秋

白秋詩抄目次

小序……………三

「海豹と雲」抄

水上……………二

獨神……………三

言問……………六

狼……………七

螢に……………二〇

早春……………三

水禽……………三

奉悼曲……………五

白鷺……………六

白牡丹……………二六

和み……………二九

鴛鴦……………三一

老鷄……………三三

汐首岬……………三五

曇り日のすホーヅク海……………三七

樺太の山中にて……………三九

冬眠……………四〇

雜木……………四二

月夜の谿……………四四

沼……………四七

影……………四八

泉石……………四九

野菜……………五〇

童女……………五一

「水墨集」抄

架橋風景	五三	李思訓	七九
鋼鐵風景	五四	老子	八〇
天王寺の朝涼	五七	王摩詰	八二
墓地	五九	林泉の空	八三
月と美童	六三	晚涼	八四
鵲	六五	木のあたま	八五
朝	六六	水墨牡丹	八六
白藤	六八	竹田	八七
白蛾	七〇	銀杏	八八
		千利休	八九
		時雨	九〇
雪に立つ竹	七五	蘆雁	九一
雪煙	七七	山峽の良夜	九二
雪後の聲	七七	初秋の朝飯	九三
竹林の七賢	七六	風	九四

焚 火	九七
落葉松	一〇〇
「白金ノ獨樂」抄	

白金ノ獨樂	一〇七
掌	一〇八
究 竟	一〇九
日 光	一〇九
夏	一一〇
ヤサイ	一一〇
金	一一一
貧 者	一一一
薔 薇	一一二

「畑の祭」抄

崖の上の麥畑	一一五
遠 樹	一一九
新 月	一二二
雨中小景	一二四
海 雀	一二六
野茨に鳩	一二六

「雪と花火」抄

公園の薄暮	一二五
夜の官能	一二七
露 臺	一四〇
雜艸園	一四一
心とその周圍	一四六
物理學校裏	一五二
柳の左和利	一五七

おかる勘平	一五九
槍持	一六一
忠彌	一六五
キヤベツ畑の雨	一六六

「邪宗門」抄

邪宗門祕曲	一七三
室内庭園	一七五
濃霧	一七七
赤き花の魔睡	一八〇
曇日	一八一
接吻の時	一八四
濁江の空	一八六
蜜の室	一八八
謀叛	一九〇

序樂	一九二
冷めがたの印象	一九四
噴水の印象	一九六
盲ひし沼	一九八
惡の窓	二〇一
蟻	二〇七
大寺	二〇九
玻璃鱈	二一一
微笑	二一二
凋落	二一四
晩秋	二一五
飢渴	二一六
尋めゆくあゆみ	二二〇
顔の印象（精舎 醋の甕）	二二四

海豹と雲

昭和四年八月初版・アルス刊

水上

水上^{みなかみ}は思^{おも}ふべきかな。

苔^{こけ}清水^{しみず}湧^わきしたたり、

日^ひの光^{ひかり}透^すきしたたり、

楓^{かえ}、馬^あ酔^し木^び、枝^えさし蔽^{おほ}ひ、

鏡^{かがみ}葉^はの湯^ゆ津^つ眞^ま椿^{つばき}の眞^ま洞^{ほら}なす

水^{みな}上^{かみ}は思^{おも}ふべきかな。

水^{みな}上^{かみ}は思^{おも}ふべきかな。

山^{やま}の氣^きの神^{こころ}處^との澄^すみ、

岩^{いわ}が根^ねの言^{こと}問^とひ止^やみ、

かいかがむ荒^{あら}素^す膚^{はだ}の

荒魂あらみたまの神靈かみむすび、神つどへる
水上みなかみは思ふべきかな。

水上みなかみは思ふべきかな。

雲、狭霧さぎり、立ちはばかり、

丹にの雉子きし立ちはばかり、

白き猪いんの横伏よこふし喘あへぎ、

毛あしの荒物もののことごとに道塞ふたぎ寝ぬる

水上みなかみは思ふべきかな。

水上みなかみは思ふべきかな。

清清さわさわに湧わきしたたり、

いやさやに透すきしたたり、

神ながら神寂さびび古ふるる

うづの、をを、うづの幣帛ひてぐらの緒をの鎮しづもる

水上みなかみは思ふべきかな。

水上みなかみは思ふべきかな。

青水あをみな沫わとよみたぎち、

うろくづの堰せかれたぎち、

たまきはる命いのちの渦うずの

渦卷うずまの湯津ゆづ石村いはむらをとどろき揺ゆる

水上みなかみは思ふべきかな。

獨神

天地あめつちの初發はじめの時、

かぎりなく虚むなしき時、

獨神ひとりがみ、成なり坐ましにけり。

萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。こをろ。

國稚く、浮脂なす、
海月なす漂へる時、
獨神、ひと柱のみ。
萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。こをろ。

萬象無し、光すら、
影すらも、頼む影、
獨神、ただ幽かにて。
萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。こをろ。

窮^{きう}みなし、常久^{とこは}に、

窮^{きう}みなし、文^{あや}もなし、

獨^{ひとり}神^{がみ}、御身^{みみ}隠^{ひそ}します。

萌^もえ騰^{あが}る葦^{あし}牙^かの

鮮^{さみ}緑^{どり}の神^{かみ}よ。こをろ。

晝^{ひる}もなし、夜^よもなし、

寒^ふしとも、暑^{あつ}しとも、まだ、

獨^{ひとり}神^{がみ}、ただ徹^{とほ}ります。

萌^もえ騰^{あが}る葦^{あし}牙^かの

鮮^{さみ}緑^{どり}の神^{かみ}よ。こをろ。